

『まことの礼拝者』 ヨハネの福音書 4 章 16～24 節

1. 現状

4 章前半の「サマリアの女」の話は、1～42 節まで続いています。今日は、16～24 節を学んでいきます。イエス様はユダヤからガリラヤへの旅の途中、サマリアのスカルという町の近くの「ヤコブの井戸」のところで、水を汲みに来た一人のサマリアの女性に、「わたしに水を飲ませてください」と頼みました。そのように語りかけることをきっかけとしてイエス様は、ご自分こそが、もはや渴くことのない水、「永遠のいのちの水」を与える方であることを彼女に示していかれたのです。彼女は 15 節でイエス様に、「主よ。私が渴くことのないように、ここに汲みに来なくてもよいように、その水を私に下さい。」と願いました。この彼女の願いを受けてイエス様は、「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい。」と言いました。これはどういうことでしょうか。「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい。」と言われても夫とは離婚していて、夫はいませんし、今一緒にいるのは夫ではなく、ただ同棲しているだけの人ですから、夫ではありません。それならば、なぜイエス様はこのように言われたのでしょうか。それは、彼女が、主の御前に、自分をありのままにさらけ出し、それを悔い改める必要があったからです。「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい。」というイエス様の言葉は、彼女にとって、とても痛い言葉だったでしょう。できれば、そこだけは触れてほしくなかった。それでもイエス様がそのように言われたのは、彼女が「永遠のいのちの水」を受けするには、どうしてもそのことが避けられなかったからです。彼女が「永遠のいのち」を得るためには、自分の中にある罪をそのままにしておくわけにはいきませんでした。それを、主の御前にさらけ出さなければならなかったのです。このサマリアの女性が隠していた罪に光を当てるために、イエス様は夫のことに触れたのです。

彼女は「私には夫がいません。」と言います。するとイエス様は「自分には夫がない、と言ったのは、そのとおりです。あなたには夫が五人いましたが、今一緒にいるのは夫ではないのですから。あなたは本当のことを言いました。」と言ったのです。ここで一気に、この女性がこれまでどのように生きてきて、今どのような生活をしているのかが明らかになっています。そしてそれと同時に、イエス様が彼女のこれまでの歩みと、今どのように生きているのかをはっきりと知っておられることも明らかになっています。このイエス様の言葉は、注目に値します。なぜなら、彼女の告白に対して、イエス様はそれを暖かく受け止めておられるからです。彼女に対して、「なぜそんなに男を変えたのかとか、そのような同棲生活は正しくない」と言うこともできたでしょうが、イエス様はそのようなことは一言も言わず、むしろ愛と善意をもって受け止めてくださいました。それは、今日も同じです。イエス様は、私たちの真実な悔い改めを、暖かく受け止めてくださるのです。それは、イエス様が彼女の罪をいい加減にして扱っておられたということではありません。イエス様はここで、「今一緒にいるのは夫ではないのですから。」と言われました。それが正しいことではないということをはっきりと言われたのです。しかし、だからといって彼女を叱責したり、断罪したりするのではなく、「あなたは本当のことを言いました。」と、受け止められました。これが、イエス様が、私たちにも取ってくださる態度です。こうして初めて、自分の姿が示されるのです。イエス様は、私たちの罪の告白と悔い改めを、暖かく受け止めてくださるのです。ですから、私たちに求められていることは、ありのままに、正直に、イエス様の前に出ることです。自分がどんなに汚れていても、それを隠すのではなく、それをさらけ出しながら、救い主イエスのところに来て、「永遠のいのちの水」を求めると、イエス様は、決して渴くことがない、生ける水を与えてくださいます。その水は、「その人の中で泉となり、永遠のいのちの水が湧き出ます。」

それにしても、当時の社会で、五人の男と結婚と離婚を繰り返し、六人目と同棲しているというのは、よほど強い思いがなければ出来ません。異性関係においてだらしが無い、ということでは説明できないものが彼女にはあると思います。彼女は、真実な愛を求めていたのでしょう。彼女は、相手が自分を、自分の願ったように愛してくれることだけを求めていたのです。愛されることを人一倍求めながら、自分が愛すること、つまりは相手のために配慮すること、犠牲を払うことは全く考えていない、それでは夫婦の関係は破綻します。そこに彼女の抱えている深い闇があるのです。その闇はしかし、私たちの誰もが抱えているものではないでしょうか。この人のように極端なことはいないか

もしも、相手に自分を愛してくれることを求めるばかりで、自分が相手を本当の意味で愛することができていないということには、誰もが心当たりがあるのではないのでしょうか。

2. まことの水への渇き

イエス様は彼女が抱えている闇をはっきりと知っておられます。イエス様が「わたしに水を飲ませてください」と彼女に語りかけたのは、彼女をその闇から救い出すためでした。イエス様に「水を飲ませてください」と頼まれたことによって、彼女の生活に新しいことが起り始めた、よどんでいた心が動き始めたのです。そしてイエス様とのやりとりの中で彼女は逆にイエス様に、「主よ。私が渇くことのないように、ここに汲みに来なくてもよいように、その水を私に下さい。」と願っていったのです。つまり彼女の心の中の、まことの水への渇きがここに現れ出ているのです。

イエス様は、そのように渇きを覚えている彼女に、渇くことのない生きた水を与えようとしておられます。飲む人の「内で泉となり、永遠のいのちの水が湧き出ます。」そういう水を与えて下さるのです。しかし、イエス様からこの「永遠のいのちの水」をいただくためには、自分の渇き、言い替えれば自分がかかえている闇を、イエス様の前にさらけ出さなければなりません。イエス様はどうにそれをご存知です。でも私たちの方も、それをイエス様の前で認め、イエス様とそれを共有することが必要なのです。そのためにイエス様は彼女に、「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい。」と言ったのです。ここで突然夫の話を持ち出すのは唐突です。けれどもそれこそが彼女の人生の最大の問題なのです。そこにこそ、彼女の抱えている罪があり、それが彼女の渇きを生んでいるのです。彼女がかかえている罪の闇をイエス様は明るみに出し、彼女との間で確認しようとしておられるのです。それは彼女の罪の闇を暴露して責めるためではありません。その罪を、イエス様が共に背負って下さるため、いやむしろその罪の重荷をイエス様が代って背負って下さり、十字架にかかって死んで下さることによって、彼女をその重荷から解放し、彼女が赦されて新しく生きることができるようにするためです。

3. 礼拝すべき場所

初対面のイエス様が、自分のこれまでの歩みの全てを、また自分が今何に苦しんでいるのかを全て知っていることを知らされたこの女性は、「主よ。あなたは預言者だとお見受けします。」と言いました。「預言者」とは神から遣わされた人、それゆえに神の力が宿っている人です。この「預言者だとお見受けします」という言葉ですが、これは彼女がイエス様をメシヤ(救い主)だと認めていたということを示しています。というのは、サマリア人はモーセを預言者と認めていましたが、それ以降の預言者は認めていなかったからです。モーセの次に登場する預言者は、メシヤご自身でした。ですから、彼女がここでイエス様に対して「預言者だとお見受けします」と言ったのは、彼女がイエス様をメシヤ、救い主と認めていたからなのです。ここで、今まで眠っていた彼女の信仰心が呼び覚まされました。彼女は生まれて初めて信仰を自分の問題として考えるようになりました。それまでは自分がどこから来てどこへ行くのか、何のために生きているのかもわからず、たださまよっていましたが、ここに来て初めて自分の心の目を天に向けるようになったのです。

そのように思った彼女が続けてイエス様に語ったことも、やはり私たちには唐突に感じられます。彼女は「私たちの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」と言ったのです。ここで彼女は「礼拝」のことを話題にしています。どうしてかということ、彼女が信仰について考えた時、ある一つの疑問が生じてきたからです。それは、「礼拝すべき場所」はどこかということです。これは、サマリア人とユダヤ人との対立についての話です。もともとユダヤ人とサマリア人は、同じイスラエル民族でした。しかし、その昔イスラエル王国が北と南に分裂した後で、北王国イスラエルは生けるまことの神から離れてしまったため、ついに紀元前 722 年に東方のアッシリア帝国によって滅ぼされてしまうと、主だった男たちはみなアッシリアへ連れて行かれ、その後に残った貧民たちの所にアッシリア人をはじめとした多くの異民族の男性が送り込まれて来たために、彼らは混血族になってしまったのです。ユダヤ人は血の純潔を特に重んじていたので、それ以来、彼らを異邦人同様に蔑視

するようになりました。「私たち」とはサマリア人のことであり、「**私たちの先祖**」というのは、ソロモン王の後イスラエル王国が南北に分裂してできた、北王国イスラエルのことです。その先祖たちが礼拝した「**この山**」とはゲリジム山のことであり、スカルの町はその近くにあったのです。南王国ユダは、ダビデの町でありソロモンが神殿を築いたエルサレムこそが礼拝すべき場所であると主張していました。それに対してエルサレムを失った北王国イスラエルの人々は、ゲリジム山に聖所を築き、そこを「**礼拝**」の場と決めました。ユダヤ人とサマリア人の対立の一つの要因は、「**礼拝**」すべき場所はエルサレムか、ゲリジム山か、ということにあったのです。

しかし、どうしてこの女性はここで突然「**礼拝**」の場所の話をし始めたのでしょうか。自分の自堕落な生活ぶりをイエス様にずばりと指摘されたので、話をそらそうとしたのでしょうか。そうではないと思います。彼女のこの言葉には、彼女の心の叫びが現れているのだと思います。自分の抱えている闇と、それによる自分の深い渴きを全てお見通しである預言者に、彼女は聞きたいことがあるのです。それは、「**まことの礼拝**」はどうしたらできるのか、ということなのです。

4. まことの礼拝

サマリア人とユダヤ人はそのことを巡って対立していました。神を本当に「**礼拝**」することができるのはどちらか、という対立です。それはつまり、生きておられる神と本当に交わりを持ち、共に生きることができるのは何によってなのか、という問いです。それはこの女性がかかえている闇、渴きと一見何の関係もないことのように思えます。彼女は人間どうしの愛を追い求めてきたのです。本当に愛し合って共に生きる相手を求めて遍歴する中で、多くの人を傷つけ、自分自身も深く傷つき、もはや愛することも愛されることもできないと感じている。愛されることばかりを求め、誰一人をも本当に愛することが出来なかった自分の人生は大失敗だったと苦しんでいるのです。

その彼女の苦しみ、渴きの根本にあるのは、実は神との交わりの喪失です。自分に命を与え、常に共にいて下さり、愛をもって導いて下さる神とのつながりを失っていること、つまり「**まことの礼拝**」を失っていることこそが、彼女の苦しみの中心にあるのです。なぜなら、神との間に愛し合う関係があることと、人との間で愛し合う関係を持つことは不可分に結びついているからです。神に愛されることの中でこそ私たちは、人に愛されることばかりを求める思いから解放されて、人を愛することができるようになるのです。神に愛され、神を愛することを知っている人は、人との間にも、愛し、愛される関係を築くことができるのです。

神を「**礼拝**」するというのは、神を愛し、神に愛される関係に生きることです。「**まことの礼拝**」において神に愛されていることをはっきりと感じ取り、その愛に応えて自分も神を愛して生きるならば、人をも愛し、愛される喜びに生きることができるのです。だから、「**まことの礼拝**」は何によってできるのか、ということと、人と愛し合うことを失っている苦しみ、渴きとは、関係がないどころか、最も深いところで結びついているのです。この女性自身が、そのことをはっきりと意識していたわけではないでしょう。イエス様はこの彼女の心の叫び、はっきりとは意識されていない渴きをしっかりと受け止め、それに応えておられます。

21 節で「**女の人よ、わたしを信じなさい。この山でもなく、エルサレムでもないところで、あなたがたが父を礼拝する時が来ます。**」と語りました。これは、あなたが無意識の内に求めている「**まことの礼拝**」があなたに与えられる、という約束です。つまり、あなたはあなたのことを本当に愛しておられ、あなたを守り導こうとしておられる父である神と出会い、その方を「**礼拝**」することができるようになるのだ、その父である神との愛の関係に生きる場である「**まことの礼拝**」があなたに与えられるのだ、とイエス様は言っているのです。

どこで「**礼拝**」すべきなのかという彼女の疑問に対して、イエス様はどこで「**礼拝**」するのかということではなく、どのように「**礼拝**」するのが重要だと言われました。このどのように「**礼拝**」するのかというのは、どのような仕方でも「**礼拝**」したら良いのかということだけでなく、どうしたらそのような「**礼拝**」をすることができるのかということも含まれていました。いったいどのように「**礼拝**」したら良いのでしょうか。

その「**礼拝**」はどのようにして与えられるのでしょうか。「**わたしを信じなさい**」とイエス様は言っておられます。

イエス様を信じることによってこそ、罪人である私たちは神の子とされ、父を「礼拝」する「まことの礼拝」を与えられるのです。この「まことの礼拝」こそ、イエス様が与えて下さる水です。14 節で「しかし、わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。」と言われていたのは、このイエス様を信じることによって与えられる「まことの礼拝」なのです。

23 節でイエス様は、「しかし、まことの礼拝者たちが、御霊と真理によって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はそのような人たちを、ご自分を礼拝する者として求めておられるのです。」と言っています。21 節では、「あなたがたが父を礼拝する時が来ます」と将来への約束が語られていました。しかしここでは、「今がその時です」と言われています。今、それはイエス様が彼女と出会い、語りかけて下さっている「今」です。イエス様と出会った時、それが誰にとってもこの「今」なのです。

5. 霊と真理による礼拝

24 節には、「神は霊ですから、神を礼拝する人は、御霊と真理によって礼拝しなければなりません。」とあります。これは、「まことの礼拝」のための心構えを語っているものではありません。霊である神が私たちの「礼拝」を求めておられ、そのためにご自身の霊である聖霊を送って下さって、私たちに語りかけ、「まことの礼拝」へと招いて下さるっているのです。

では、「御霊と真理によって礼拝」とはどういうことなのでしょう。これは、「肉」とか、「物質」、「偽り」に対するものとしての「御霊」、「真理」のことを指しています。具体的にはエルサレムの神殿における「礼拝」に対する霊とまことの「礼拝」のことです。どういうことかという、ユダヤ人たちは、エルサレムにある神殿で、律法に従って、動物などのいけにえをささげていけば「礼拝」していると思っていましたが、それは単なる形だけの「礼拝」、見せかけだけの「礼拝」であって、「まことの礼拝」とはそのようなものではないということです。なぜなら、ここに「神は霊ですから」とあるように、神は単なる形だけの、見せかけだけの「礼拝」を求めておられるのではないからです。「神は霊ですから」、神の御霊による、霊と真心からの「礼拝」を求めておられるのです。

しかし、人間はこの神の御霊を失ってしまいました。もともと人間は神のかたちに造られたのに、これを失ってしまったのです。神のかたちとは何でしょうか。神のかたちとは「神は霊」のことです。人間はもともと神の霊を持つ者として造られたにもかかわらず、最初の人間が罪を犯してしまったことで神との交わりが断たれてしまいました。それを霊的死と言います。霊的に死んでしまった人間は、神も、神の恵みも分からなくなってしまいました。このような人間がどうやって神を「礼拝」することができるのでしょうか。できません。ですから、神を心から「礼拝」するためには、この神の霊を持たなければなりません。

どうしたら持つことができるのでしょうか。ヨハネの福音書 3 章 3 節で、イエス様はニコデモに「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」と言われました。そうです、「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」そのためには、自分の罪を悔い改め、イエス様を救い主として信じ受け入れなければならないのです。それが神の示してくださった唯一の方法でした。イエス様は、3 章 13～14 節で「だれも天に上った者はいません。しかし、天から下って来た者、人の子は別です。モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければなりません。」と言われました。ですから、私たちが救われるためには、十字架に付けられたイエス・キリストを信じなければなりません。信じる者は救われます。イエス様を信じる者は罪が赦され、神の御霊を受けることができます。そして、この神の御霊によって新しく生まれた人は、霊とまことによる「礼拝」することが出来るようになるのです。自分の努力や熱心さだけでは、このような「礼拝」をささげることはできません。私たちが神を「礼拝」するためには、どうしても神の霊である御霊の助けが必要なのです。御霊の力によってこそ心からの「礼拝」をささげることができるのです。

ローマ書 12 章 1 節「ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。」